

平成 27 年度 発達障害の可能性のある児童生徒等に対する早期・継続支援事業
 (発達障害早期支援研究事業)
 成果報告書 (概要版)

実施機関名 (鹿沼市教育委員会)

1. テーマ

研究成果の一般化を目指した発達障害の可能性のある児童生徒に対する
 早期発見・早期支援の在り方の研究

2. 問題意識・提案背景

平成 26 年度の研究から指定校では、多層指導モデル MIM 教材を活用し、特殊音節に関する指導を 1 年生に実施したことにより、「読み」にやりにくさをもつ児童が明確になり、その後の早期支援につなげることができた。

しかし、MIM-PM により、読みにつまずきをもつ児童の早期発見・支援はできたが、「読めない」ということの背景をつかむまでの分析や解釈は、不十分であった。

また、各小学校においても、MIM による特殊音節に関する指導はなされているが、2nd・3rd ステージの効果的な指導については課題となっている。

さらに、アセスメントにより児童の認知特性に応じた個別支援を十分に行っても、交流及び共同学習の基盤となる学級がしっかりととして落ち着き、親和的な雰囲気であれば、支援の効果も薄く、その期待も難しい。そこで、インクルーシブ教育システムにおける交流及び共同学習の面からも、アプローチが不可欠である。

また、児童の認知特性は多様であり、ましてや学び方も一人一人異なっている。今後は、教師の教え方に子供が合わせるのではなく、子供の学び方に応じて教え方を変えていくことが重要であり、「学び方を学ぶ」ということがポイントとなってくる。

3. 指定校について

(小学校)

指定校名：												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	42	2	32	1	29	1	30	1	36	1	32	1
特別支援学級	1		2		3		6	2	3	1	5	2
通級による指導 (対象者数)												
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	スクールカウンセラー		その他	計
教職員数	1	1	13	1	2		1					19

4. 指定校における取組概要

①目的・目標

(1) 児童の認知特性に対応した学習の保障

発達障害の可能性のある児童に対する教育的アセスメントを開発し、実施する。また、アセスメントを生かした支援の在り方を研究し、実践する。早期発見・早期支援を有機的に機能させることにより、学習の保障を図る。

(2) すべての児童に対する支援としての第一次支援の充実

学び合う関係づくりを重視した授業、マルチ知能理論を導入した「学び方を学ぶ」授業実践に取り組む。

②学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒の明確化

多層指導モデル MIM を活用した読みの能力を把握するためのアセスメントや、発達性読み書き障害(発達性 dyslexia)検出のための読み書きスクリーニング検査、特異的読字障害・特異的算数障害の的確な判断・支援のためのアセスメントを実施することにより、児童のつまずきややりにくさ等を早期発見する。

③学習面や行動面で何らかの困難を示す児童に対する支援内容

(1) 授業（一斉指導）における指導方法の工夫内容

ア 全学級・全教科を対象とした学び合う関係づくりの育成と児童相互のよさを共有し合う授業への改善

・ペアまたはグループ、あるいは自由に友だちと尋ね合ったり考えを交流したりする共同学習「学び合い」の導入

イ 全学級・全教科を対象としたユニバーサルデザインな授業によるわかる、できる授業の展開

・八つのマルチ知能と「やる気」「注意」「記憶」の三つの力を取り入れた「学び方を学ぶ」授業の展開

(2) 個別の指導における指導方法の工夫内容

ア 「ことばのじかん」の創設

・低学年の「読み」に特化した指導を行う時間として、1年生は週2時間、2年生は週1時間特設して位置付けた。

イ 「チャレンジタイム」における個別指導

・より一人一人の児童の実態や特性を考慮した指導を目指す。例えば、「読み」にやりにくさをもつ児童に対しては、そのやりにくさが、どのつまずきから生じているものなのかを教師の観察や心理検査等から明らかにし、その指導を重点的に行う。

④学習面や行動面で何らかの困難を示す児童に対する支援内容の妥当性の評価手法

(1) 早期発見・早期支援に対する内容について

ア 多層指導モデルにおける MIM-PM の結果

イ 教研式標準学力検査 CRT(Criterion Referenced Test)の読み・書き・算数に関する結果

(2) 授業（一斉指導）における指導方法の工夫内容について

ア 学級集団アセスメント Q-U(Questionnaires-Utilities)における学級

満足度尺度や学校生活意欲尺度の結果

イ 「学び方を学ぶ授業」における児童の振り返りシートの結果

・8つのマルチ知能「言語的知能」「論理・数学的知能」「空間的知能」「身体・運動的知能」「音楽的知能」「対人的知能」「内省的知能」「博物的知能」の選択状況

5. 主な成果

(1) 児童の認知特性に対応した学習の保障について

MIM教材を活用した指導では、指導者が予防的な指導・早期発見・確実な支援の重要性を理解し、1stステージ指導の前向きな取組へと繋がった。また、アセスメントを生かした2nd・3rdステージ指導では、ゲーム的な要素を取り入れながら教材に取り組んだこと、個別の配慮計画を用いてたくさんの■がつく子供についての指導方針を明確にすることにより、効果的な指導ができた。

また、MIM-PMによるアセスメント結果を市教委が管理することにより、学校間の格差なくMIMによる指導を実施することができた。

平成26年度の研究から、小集団や個による指導に特化した2nd・3rdステージ指導では、その支援の場をどのように確保していくかが課題であった。指定校では、「ことばのじかん」を創設し、時間割に位置付けることにより、計画的、効果的に少人数指導体制による「読み」の指導を行うことができた。

「チャレンジタイム」による支援では、教師の観察や保護者等からの情報、客観的なデータによる児童一人一人の詳細な実態把握から、その実態に応じた指導を丁寧に行うことで、児童の認知特性に応じた支援をすることができた。

以上のことから、本研究の目的の一つである児童の認知特性に対応した学習の保障については、概ねその目的を達成したと考えている。

(2) すべての児童に対する支援としての第一次支援の充実について

指定校では、学び合う関係づくりを重視した授業、マルチ知能理論を導入した「学び方を学ぶ」授業に取り組んだ。

学び合う関係づくりを重視した授業では、「学び合い」を計画的に取り入れることで、人間関係を築き親和的な学級づくりに努めた。学び合いのなかでよさを認める活動を繰り返し行うことで、学び合いの土台となる温かい人間関係を築くことができた。また、自分のよさを友達に認めてもらえることで自信をもち、安心して学習に取り組めるようになった。

マルチ知能理論を導入した「学び方を学ぶ」授業では、8つのマルチ知能の視点からユニバーサルデザインな授業を試みた。授業を重ねるごとに児童は、自分の認知特性を理解し、自分の学びやすい方法を選んで学習することができるようになった。また、ペア活動による学び合いを取り入れることで、友達の学び方を用いて理解しようとする姿勢も見られるようになった。

以上のことから、学び合う関係づくりを重視した授業を通して、温かな人間関係が育まれ、親和的な学級に近付いたこと、また、「学び方を学ぶ」授業を通して、児童が自分に合った学び方を取り入れることができたことから、すべての児童に対する支援としての第一次支援は概ね達成できたと考えられる。

(3) 本研究事業内容や指定校の研究内容、その成果の一般化について

本研究事業による教育委員会の役割は、教員の発達障害に関する専門性の向上を図るとともに、研究内容やその成果を市内の小中学校に広めていくことであった。教員は、MIM 教材を活用しての指導や、MIM-PM によるアセスメント結果を受けた指導を、研修会を通して理解し、実施することができた。このことから、発達障害の可能性のある児童の早期把握、早期支援における専門性の向上が図られたと考えている。

すべての児童に対する支援としての第一次支援の充実については、「学び合い」を通して温かな人間関係を築き、親和的な学級づくりを目指した。指定校における公開授業研究会を通して、教員はこの基本的な考え方を理解することができたと考えている。

6. 今後の課題と対応

(1) 児童の認知特性に対応した学習の保障について

MIMによる指導はしたが、その結果としてある一定の割合で3rdステージ対象児童が存在し、その指導が課題となっている。また、「読み」以外に「書き」や「計算」などのやりにくさをもった児童を早期に把握し、支援することも必要である。これらの課題への対応策として、スクリーニング検査の実施は、児童の認知特性を把握し、一人一人の教育的ニーズに応じた指導を進めていくために効果的である。今後はスクリーニング検査の理解とその習得が課題である。

また、児童への学習を保障するためには、その基盤となる支援体制の構築が急務である。特に本市は、単学級の学校が多いため、学級担任だけに任せるのではなく、チームで取り組んでいくことが大切である。誰がMIMの3rdステージ指導や、スクリーニング検査を担当するのかまで、具体的に示された校内支援体制の構築が望まれる。

さらに、多様な支援を施してもなかなか成果の見られない児童に対して、外部機関との連携の必要性を感じている。つまりきややりにくさに応じ、どの機関との連携が適切であるか判断することも含め、外部機関との連携体制の構築も図っていききたい。

(2) すべての児童に対する支援としての第一次支援の充実について

指定校では、「学び合い」を通して、良好な人間関係を構築し、親和的な学級づくりを目指した。本来ならば、目指す児童像を掲げ、それに向けた手立てを講じ研究を進めていくことになる。しかし、指定校では、今現在の児童の姿から改善する視点を教員が示し取り組んだ。今後は、それらの視点をまとめ共通理解を図っていく必要があると考えている。

また、マルチ知能理論を導入した「学び方を学ぶ」授業では、あくまでも認知特性に応じた学び方を選択することは手段であり、目的ではないことについては、教員間で共通理解が図れた。しかし、子供たちが本時の授業を振り返ったとき、何を学んだか、それが学び方ではなく、教科本来のねらいが達成できたか、といった視点で振り返ることについては、まだ、研究実践の余地が残っていると考えている。

(3) 本研究事業内容や指定校の研究内容、その成果の一般化について

教員の専門性の向上は図られたが、専門性が向上したのは直接 MIM 教材による指導を担当した一部の教員や、2nd ステージに関わった管理職である。平成 28 年度も、また、平成 27 年度と同様の指導を継続していくことを考えると、新たなスタッフへの研修が必要となってくる。今後は、市教委主導ではなく、校内で指導法の研修の充実を図っていく必要があると考えている。

7. 問い合わせ先

組織名：鹿沼市教育委員会

- (1) 担当部署 学校教育課指導係
- (2) 所在地 栃木県鹿沼市今宮町 1688-1
- (3) 電話番号 0289-63-2236
- (4) FAX 番号 0289-63-2118
- (5) メールアドレス m01yuzawa@city.kanuma.lg.jp